左記の記事１から記事３を読んで、次の問いに答えなさい。

1．記事１には、戦争の中で育った小田靖子さんの小学生時代の様子が書かれています。記事に書かれていることについて、(1)･(2)に答えなさい。

（１）当時、おやつにしていた季節に応じた甘いものとして、具体的に記述されているものを、三つ書きなさい。

野いちご、スグリ、アケビ

（２）節電のために、夜の一定時間、電気が消えてしまう時間があり、冬は、どのようなことをしたと記述されていますか。記事１の中から抜き出しなさい。

家族5人でこたつにはいり、順番に歌を歌った

記事1

イラスト　佐々木優子

歴史の中に入り込む戦争

小田靖子

8月のカレンダーを開いた。8月15日、終戦記念日と書いてある。それを眺めながらあの時代のことがよみがえってくるのである。

第2次世界大戦が始まったのが、私が国民学校1年生の時、終戦になったのが国民学校5年生の時である。まさに小学生時代を戦争という中で育ったのである。

食糧難であり、主食の米は家庭の人数に応じた配給であった。しかしそれだけで足りるわけではない。学校の校庭の半分以上は畑になり、ジャガイモやサツマイモなどが育てられていた。遊ぶ場所も限られていたのである。

家にはおやつもなく、おやつにしていたのは野いちご、スグリ、アケビなど、季節に応じた甘いものであった。

砂糖もなく、家では畑にサトウキビが植えてあった。食塩はどうだったのだろう。私の記憶の中には今はない。

肉はあった。鶏をたくさん飼育し卵を産ませ、必要になれば鶏をつぶして肉にして食べた。ウサギも食べた。熊の肉を持ってきてくださる方もいた。先日、田沢湖方面に行って驚いた。熊の肉の缶詰を売っている店があった。しかし懐かしさはあっても、買う気持ちにはなれなかった。とにかくおやつのない子供時代には、自然からの恵みをふんだんにいただいたことが心に染みついている。

それから当時、節電のためであろうか、夜の一定の時間、電気が消えてしまう時間帯があった。冬のこんな時間は、家族5人でこたつにはいり、順番に歌を歌った。あの時間の楽しさは、今でも心に残っている。

食糧があふれている今の時代には考えられない体験をしてきた私たちのつらい生活も、終戦記念日として歴史のひとこまにまとめられていくのであろう。あの時代を知らない世代に、少しでも話して知らせるのが、残り少ない人生で、私の役目であるように思う。

（雫石町八卦、83歳）

（2018年8月15日付・岩手日報13面）

記事2

日報論壇

「原爆」の発信を使命に

畠山　公

「夾竹桃物語～わすれていてごめんね」という絵本がある。原爆の炎で燃えていた広島の夾竹桃を瀕死の犬たちが自らの命をかえりみずに救った物語だ。この絵本の感想コンクールが毎年開かれていて、今年は18回目だった。

僕はこの絵本を読んだ。

「もう原爆のことは学校で習って知っている。遠い昔に遠い場所で起こった怖く悲しい出来事だ」と心のどこかで思っていたところにきつく喝を入れられた思いになった。もっとしっかり学びたい。この目でじかに原爆の被害に遭ったところを目の当たりにして、そこで感じとった空気を発信していきたいと考えた。

その気持ちを率直に感想文につづった。審査員の方に通じたのか、入賞して、8月6日の広島の平和記念公園での平和記念式典に招待していただいた。「初心に恥じないように、現地でじかに感じた空気をこの場を借りて発信したい。

まず感じたことは、平和記念式典も、平和記念資料館にも外国から来た人がとても多くいたことだ。日本人だけの問題でなく、世界中で「原爆」に関心を持ち、平和について考える。国境を超えて自分の言葉で語り合えたらどんなにすてきなことだろう。そのために外国語でコミュニケーションをとるための基礎を高めたいという意欲がわいた。

次に、平和記念資料館から受けた印象だ。どれほど衝撃的な映像が目に飛びこんでくるだろうと覚悟して臨んだが、確かに胸が締めつけられる思いはしたものの、思ったほどではなかった。被爆証言をしている方のお話では、リニューアル前はそうではなかったらしい。子どもに配慮して衝撃を緩和するようになったということだ。

今を生きる若者が後世に伝えるために、まずは受け入れやすいように変わってきているらしいが、緩和された内容だけしか知らない時代が来てもいいのだろうか。覚悟を決めて真実の資料に立ち向かう人間がいるべきで、その中の一人に自分がなる使命を感じた。

他にも多くの被爆証言を聞いたり、原爆ドームや日赤原爆病院、広島城をはじめ、被爆した樹木や建物を見たりして、かけがえのない旅にできたと感じている。いつか発信する機会をと願う貴重な財産だ。

ディズニー映画「戦火の馬」の原作者、マイケル・モーパーゴは、作品の舞台である第1次世界大戦より何十年も後に生まれた。原爆投下より何十年も後に生まれた僕たちにもきっと語り継ぐことはできるはずだ。これからも学び、未来へ発信する一人でありたい。

（大船渡市　中学生　13歳）

（2018年8月15日付・岩手日報9面）

記事3

論説

2018年８月15日

終戦の日

心に「平和」「命」の軸を

きょうは平成最後の「終戦の日」。本紙声欄の「戦後73年」特集には50通近い投稿が寄せられた。投稿数自体は減少傾向にあるが、何度も苦心して書き直した文面は重みを増し、もどかしさが高まっているように感じられる。

薄れゆく幼少期の記憶をなかなか呼び起こせない。この生々しい痛みの経験を確実に次代に伝えたいが、明快な答えが出ないまま焦りばかり募る。そんな中、「戦争を知らない政治家」による改憲の動き。もどかしさには、いくつもの要因があるだろう。

戦後日本を貫いてきた「平和の希求」という太い軸が、先細っている。「戦争体験者がいなくなる日」が現実のものとして迫っている。

世界に目を転じれば、昨夏以来、核廃絶に向け希望が生まれた。核兵器禁止条約が国連で採択され、その原動力となった「核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）」がノーベル平和賞を受賞。にもかかわらず、核保有国も日本も条約への参加を拒んでいる。

この、もどかしい現状を少しずつでも変えていくため、どうあればいいか。まずは、私たち一人一人の心の中に、ぶれない「平和」の軸を据え続けることだ。体験者の「声」を継承する取り組みに、さらなる力を入れたい。

そして、もう1本のぶれない軸を心に据え付けたい。それは「命」の軸だ。

「役に立つ」ことが最優先される価値観の下、幾多の命が排斥された。特に戦時中、障害者ら社会的弱者にとってどれだけ過酷な時代だったかは、あまり知られていない。

戦争の役に立たない「ごくつぶし」「非国民」とののしられ、防空演習に参加できないからと隣組の責任者から配給米差し止めの嫌がらせを受け、「お国の役にも立てぬ子を産んだ親」と白眼視され…。秋元波留夫、清水寛著「忘れられた歴史はくり返す」（2006年）には、数々の事例が紹介されている。

戦後になると、経済成長の「役に立つ」ことが重視されるようになる。1948年に「不良な子孫の出生防止」を掲げた旧優生保護法が施行。「もはや戦後ではない」（56年度「経済白書」）と経済大国へまい進していた50～60年代に、障害者らの強制不妊手術件数がピークを迎えたことは、偶然の一致ではない。

こうした尺度は今なお根強い。先月、自民党の杉田水脈衆院議員が月刊誌への寄稿で、性的少数者のカップルについて「『生産性』がない」と主張。党内から擁護する声すら上がる。

命を軽んじてきた歴史に学ぶべきだ。自国の多様な存在を尊重できなければ、他国の人々の命の重みに思いをはせることもできまい。

（2018年8月15日付・岩手日報3面）

2．記事２には、畠山公さんが広島での平和記念式典（８月６日）に招待され、平和記念式典に出席し、平和記念資料館を訪れて感じたことが書かれています。記事に書かれていることについて、(1)･(2)に答えなさい。

（１）畠山さんは、平和記念式典や平和記念資料館でわいた意欲について書いています。それは、どんな意欲ですか、記事２の中から抜き出しなさい。

外国語でコミュニケーションをとるための基礎を高めたい

（２）畠山さんは平和記念資料館を訪れ、「使命を感じた」と書いています。それは、どのような人間になることと書かれていますか、記事２の中から抜き出しなさい。

覚悟を決めて真実の資料に立ち向かう人間

3．記事３を読んで、感じたこと、考えたことを書きなさい。

（省略）

年　　組　　名前

出題･監修は、日本新聞協会認定NIEアドバイザーで県教委学校調整課主任指導主事の女鹿芳文さんです。